

T 02

N 69

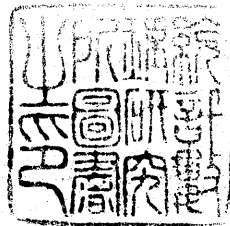
25

日本における統計学の発展

第 25 卷

話し手 正 木 千 冬

聞き手 三 渚 信 邦
奥 野 定 通



1981年8月24日(月)

正 木 宅 に て

ま え が き

- 1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*(代表者)、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三瀦信邦*、森博美*、山元周行(* 推進係)

- 2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。
- 3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。
- 4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。
- 5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

毎日新聞社に入る

奥野 主眼は統計のことについてお伺いするんですけれども、その前に、履歴書を拝見していただら、驚いたことに新聞社に10年もいらした。その辺のところ、どうして都落ちされたんですか。(笑)

正木 私は、大学にいる間、新人会で活動したり東大セツルメントもやり、また、野坂参三さんが開いた産業労働調査所で、猪俣津南雄さんや野呂栄太郎さんたちと、現代日本資本主義分析の仕事などやってましたから、卒業後はどこかで経済記者をやれたらと考えてね。それで最初にねらったのが、高橋亀吉さんが編集長だ、た東洋経済新報(社長・石橋湛山)でしたが、社内事情が息苦しいので、オレも近々やめるかもしれぬと断られた。

新聞社は朝日と毎日を受験した。朝日も受かったんだけど、大阪本社の広告部だといわれ、この方は断った。毎日には、父の友人岡実さんが副社長兼「エコノミスト」顧問をしており、その紹介で毎日に入社でき、赴任するとすぐ「エコノミスト」編集部に入れられました。大阪は余り好きではなかったが、経済雑誌に入れて本望だったわけです。

三階 「エコノミスト」に入られたわけですか。

正木 ええ、大阪へ行って「エコノミスト」に真っすぐに入った。それでいろいろやって、関心を持ったのは、失業の推定という問題。日本の場合には、表向きの失業というのは非常に少なく出るでしょう。ところが、潜在的失業者が非常にある。潜在的失業者はこうしたらえられるかというようなことで、国勢調査を利用したりして、5年ごとの国勢調査の有業者と労働力人口の大き

さの差を推定していった、大体これぐらいの幅のものだろうと推計した。昭和の4〜5年時分の論文ですが、200万前後と推定されるだろうというようなことを書いた。それは大原社会問題研究所の高野岩三郎さんに認められたですよ。そういった形で失業の推計をしたのは日本で初めてだ。直接の推計はないからね。

その後、統計に特に関係があったといえば、「エコノミスト」に統計欄がありますね。私は前から関心を持っていたし、わりに責任を持って統計欄の設計に当たっていたわけです。特にとりたててということはありませんでしたけれども、その中で私が東京へ帰って「エコノミスト」をやめさせられる直前までやっていた仕事は、生計費指数をつくるということだ。そうしたら、実質賃金なんかを推定するのに、そのデフレーターとしての生計費指数がなきゃいかぬ。ところが、その時分、戦前には日本にないんだよ。小売物価統計しかないでしょう。あとは何にもない。結局、住宅費と光熱費、教育費や何かの統計がないんだ。それを特別に調べたのが、東京府が何かでそういうものだけを調べている統計がありまして、それをくっつけて、その変動を別に調べて、家計支出の中の消費支出のウエートをかけて改訂した。結局、日本銀行の東京小売統計を、ウエートを変えて、それに脱落しているサービスの支出をかみ合わせて、「エコノミスト生計費指数」というのをずっと発表したんです。

三階 「大阪朝日」が生計費指数を……。もーと後？

正木 それは後かな。その時分に全国統計とか東京の生計費についてはなかったです。それで、どうしてもそれをつくらなきゃいかぬ。中途半端なものですけどね。

直接調べたんじゃなくて、2つの統計をくっつけ合わせまして、そういうふうなことをやった覚えがあります。

その時分に森田優三さんと知り合ったことがある。

三濤 横浜高商のころの……。

正木 大内兵衛先生のところで、森田さんに会ったんだよ。それでその話が出まして、生計費指数のつくり方についていろんな話をした。

三濤 大内先生は、当時すでに森田先生とおつき合いが……。

正木 それはずっと前から知っていました。大内先生は、財部静治さん（京都大学）の関係で統計の関係者で、ぼくはあの時分にもう日本統計学会があったんだと思っていたわ。

三濤 日本統計学会は、昭和6年にできたんだそうです。

正木 その時分かしたら。森田さんも大内先生のところに来て、ぼくらと一緒に飯を食ったり何かしたことが少々あるんだ。そういうことで、ぼくは統計局に行くまでに森田さんを知っていたし、森田さんを引っ張ってこようじゃないですかと大内さんにいったのも、そういう関係なんですよ。

三濤 先生、大学時代のゼミは……。

正木 ゼミは、ぼくの時分には土方（成美）さんだった。土方さんのときには、国民所得の推計なんかしておったが、土方さんの授業はおもしろくないんだよ。だから、それはサボっちゃったわけですよ。（笑）

三濤 土方先生では、正木先生とちょっと合いそうもないな。

正木 こちらも不勉強だったもので。

奥野 大阪の毎日にいらしたんだけれども、しょっちゅう東京に……。

正木 それは、昭和4年のあの事件（注・共産党員大量検挙事件のこと。4・ノ6事件）にひっかかっちゃって、「エコノミスト」を一週首になったわけですよ。ところが、そのときちょうど「エコノミスト」にぼくは「戦争経済学」というのを連載していたわけだ。それかわりに評判よかったんだよ。ぼくがやめたら、それが切れちゃうわけでしょう。社の方も、連載だけ続けてくれというわけだよ、身分はなしで。かれこれ1年ぐらい、首なしで新聞社で執筆したわけだ。そのうちに、今度は東京日々新聞勤務として一週復職した。またつかまって、またやめて、最後は1年ぐらいでもう一週つかまって、そのときまた首になっちゃったわけだ。（笑）

三潑 先生は、何回つかまったんですか。

正木 企画院の前に2度つかまったんだ。それで毎日新聞じゃ、「おまえは危ないから正式社員にしない」という。けれども、いろいろの関係で、執筆者としてずっと寄稿していたわけですよ。その時分に、木村禧八郎君とかいろんな人たちが「エコノミスト」に加わりました。あの時分の「エコノミスト」は、非常にこじんまりした店だったものですから、そういった無理がきいたんですね。匿名みたいな形で社員の活動をして、昭和10年までいたんですよ。

三潑 先生のつかまったのは、やはり治安維持法？

正木 いわゆるシンパ事件だよ。

三潑 向こうが引っかけるのは治安維持法ですね。当時、一緒にどんな連中が……。

正木 最初のやつはなぜつかまったかといえは、ぼくが毎日新聞社員で、社のバッジと社員手帳があるわけだ。当時、毎日新聞の社員というのは非常に信用があって、飲み屋でもそれでツケで飲ましてくれた。そこへ、たまたま村山藤四郎君という共産党の人が逃げてきたんだ。ぼくらの一高の先輩です。転々と逃げていさううちにぼくのところにころがり込んできて、「危なくなってきたんでどこかに隠れたい。それには、君の名刺や社員手帳を貸してくれ」というわけだ。それで、それを貸してやったんだ。

それがそこにあればまだいいんだけど、そうじゃなくて、村山君が、当時やっぱり逃げていた福本和夫に貸してやったんだよ。

三渚 又貸し。

奥野 ひどいものだな。(笑)

正木 福本がつかまったときに、そのバッジと社員手帳があったわけですよ。それでストレートにぼくが福本に貸してやったということに見られ、これは大物だということになって、とっつかまっちゃった。

奥野 毎日新聞社もあわを食ったでしょうね。

正木 物が物だから。村山藤四郎はかなりの理論家だけれども、そう大物じゃない。福本さんは相当の名士でしょう。だから大騒ぎになった。そんなことで、何とかして勘弁してもらって、東京に帰ってきたわけだ。それはそういった事件でした。

奥野 なるほど、シンパ事件だ。(笑)

三渚 新人会でも、ずいぶんおもしろかったんじゃないですか。

正木 ぼくはまだどっちつかずで、本当に真の運動に入るという気もないし、それだけの勇気もなかった。そうかといって、余り普通の役人や会社員になるという気もなかったんで、結局ジャーナリストという道を選んだんです。自由にしゃべれるし、勉強もできるしというので。だいがセツルメントにもいたんです。

三渚 セツルにいた方は多いですね。

正木 セツルで労働学校をつくったでしょう。それと医療部をやったんです。その連中が大体、日本における公衆衛生学や公害職業病などのパイオニアになる人です。たとえば、厚生省の初代統計局長の曾田長栄とか、関西で公害をやっている庄司光なんかいます。

そういうことで、昭和7年に本式に社の籍を失って、10年まで毎日新聞の編集部に通っていたわけですよ。そのときに、内閣調査局ができるについて、入らぬかというので、内閣調査局に推薦してもらったんだ。

奥野 かたいお役所へよく入れましたね。(笑)

正木 推薦者がいいんだね。岡田内閣の総理秘書官迫水久常君なんです。

内閣調査局から企画院へ

三渚 内閣調査局というのは、情報部の前身とも違いますか。

正木 企画庁の前身ですよ。このときは、主に中小企業の問題を研究したんですよ。中小企業というものは、日本の産業組織上大きな意味を持っていて、そのいろんな助成政策だとかそういうものを取り上げようというので、一生懸命やった。

奥野 企画庁が企画院と名前を変えるんですか。

正木 名前を変えるんですね。時局がだんだん進展してきまして、もっと強力なものにしようというので、調査局を企画庁にして、さらに企画院になる。企画院になると、内閣資源局という、軍需動員を主管する官庁と合体した。

三猪 先生の役人第ノ号は内閣調査局ですね。

正木 内閣調査局専門委員です。それも商工関係の所属で、中小企業の政策の研究をするという名目でした。当時商工省から調査官として橋井真さんと藤田國之助さんが来ていた。勅任調査官と奏任調査官と、各省二人ずつ来たわけですね。そのときに、農林省から和田博雄さんが奏任調査官で来て、その上に小濱という、農政局長をやっていた人が来ていた。大蔵省は、石渡莊太郎（後の宮内大臣）さんと山際正道（後の日銀総裁）さんでした。

三猪 それで昭和16年までいらっしゃるんですけど、例の.....

正木 企画院事件というのが15年に起こったんですね。みんなまじめに、真剣に国家を憂えた。憂えるについて、要するにこのままではどんどん軍国化して行って、全部の資源が軍需、戦争につぎ込まれたら、民生関係が危なくなるから、どこかで民生関係の物財を確保しなきゃならない。

ぼくが担当したのが繊維関係なんですよ。それからもう一つ、農林省の関係が食糧関係でしょう。食と衣と、この二つの面で、国民の最低限必要とするものはどれくらいのものだ、それは優先的に確保しなきゃならない。それから日本は当時、まだ戦争に本当に入ってなかった

から、輸出をしてほかの不足物資を買わなきゃならないから、民生用物資が最優先で、その次が輸出资材、それで残ったところを軍需に回せというのが、われわれの主張なわけですよ。ところが軍部の方は、軍需が最優先。その軍需がだんだんふくらんでいくから、生産拡充用の物資をまず先に取る。それから輸出を優先。残ったもので民需をやれといっているんですから、いつも杵の取りっこでけんかしていたわけですよ。

三渚 企画院には、陸海軍省からも来ていたんですか。
 正木 内閣調査局のときから、陸海軍から中佐級の調査官が来ており、企画院時代には、ノつえつ軍人さんが部長を占めているところもあったし、資源局と一緒にになりましたから、資源局の長官だった人が首席調査官で押さえていたでしょう。部長にも、少将クラスの人に来ていた。

それで物資動員計画に入るわけですよ。その主任の一番中心のところは、軍人さんが持っているわけだ。われわれ文官は、その周りでいろいろスタッフとしてやっていましたけれども。

三渚 国家総動員体制ですからね。

企画院のメンバーには、満鉄の調査部の方が……。

正木 いました。企画庁になってから、満鉄から来るようになった。

三渚 それは、やっぱり満鉄には優秀な人がいるから、引っこ抜いた形になるんですか。

正木 それともうノつは、日満経済が合体したでしょう。一緒になるという考え方。満洲の生産拡充計画は、大体満鉄が軍の下請でやっていますでしょう。日本の生産拡

充と満卍の生産拡充と一緒にあって、日本の物動計画をつくったわけだから。そういう意味で、満鉄からスズ組をつぐらの調査官が来ていましたね。そのノ人が、後でしばらく一緒になった和田耕作君。井上照丸さんもそうだね。

三猪 内海庫一郎さんは違いますか。あるいは後藤憲章さんは？

正木 それは、もうちょっと後かな。それとも、調査関係に来ていたのかもしれない。

三猪 いわゆる企画院事件というのは、一応いろんなことを書かれていますんですけども、先生のタッチされた側面で、企画院事件というのはどういうものだったのでしょうか。

正木 まるで空々漠々たるもので。(笑) 結果的にいえば、調査局から企画庁に持ってきたときに、私と和田博雄さんあたりと相談して人材をたくさん集めようというので、集めたメンバーの大部分が、いわゆる左傾的な人だというわけなんだ。たとえば稲葉秀三君とか、戦後の社会党の佐多忠隆君とか、勝間田清一君とか……。

三猪 それは、先生が東大の新人会やセツル時代からみんなご存じの方……。

正木 ばかりじゃないんですけども、さ、と見回して、広い視野でいろいろ発言したりした人を、とにかく優秀なスタッフなら多少色がついても構わぬというんだから、みんな集めてきたわけだ。

そういう連中が集まって、研究会をするというか、時局について話をしていたんだ。別にこれという相手はないけど。そのうち、だんだん話し合っていたことは、い

まいったような最小限度の国民生活の安定をまず確保するにはどうしたらいいとか、そこにおける国民所得的な発想で、国民所得と戦費支出の関係を結びつけて、限界を置いて、そういう危機における再生産構造をはっきりした形にする。それでブレーキをかけようというようなこと、また具体的にば、それに向かって調査をしようじゃないかというところで、挙げられちゃったわけだ。

だから、結局残ったのは、おずかに非常に茫漠たる調査計画があったというようなことと、意図的に左翼学者を梟めたんじゃないかということとでやられたわけですよ。向こうも、事件をつくるのに非常に苦労したわけですよ。ぼくらは、一体どういったらけりがつくのかわからないから。

三猪 き、かけは何かあったんですか。

正木 あったです。われわれ調査官よりも、下のところに、一部、細胞活動を復活しようというのがありまして、..それがつかまったときに、オレたちの上にはもっとわれわれの支持者がいるというようなことをしゃべったんだね。それからほっといちゃいかぬということになったのと、あの時分、全般的に統制を強化しようというので、いわゆる経済新体制というのが、主として大蔵省の系統の官僚たち、毛利英荻菟だとか、内閣総理大臣の秘書官になった迫水久常などが中心となって、笠信太郎の所有と経営の分離論などをずっ、と吸収して、経済新体制ができ上がってくるわけです。

三猪 近衛公ですね。

正木 そういう方が近衛さんの研究会の中に入ったりして、新体制運動を推進した。

三潯 具体的には、先生の企画院時代のいまのお話の、民生を確保しようということの理論的指導者は、和田博雄さんですか。フレームワークをおつくりになったのは。正木 そのときには、もう和田さんは農林省に帰っていたかな。

三潯 そうすると、当時の企画院にホスというものはあったんですか。

正木 さあね。各省から来て……。

三潯 先生は、いってみれば生え抜きというか……。

正木 だから、和田さんが帰った後では、和田さんを中心にして集まった連中の中では、ぼくだとか勝間田清一君、稲葉秀三君、そこいらが中心で、その連中がやっぱり物動計画の中心だったわけでしょう。実際、毎日仕事として物動計画に接触していますから、危機感が非常に切迫しているわけだよ。このままで行ったらどうということになるかということが、目に見えて数字に出てくるでしょう。

三潯 数字そのものを見ていらしゃるんですから。

正木 あの時点には、いろんな想定のもとに計画を立てさせられました。具体的にいうと、広東を攻撃したとき日本経済はどうかだろうかとか、シンガポールを3カ月で攻略したときは日本経済はどうかとか、半年で攻略したときには日本経済にどういう影響があるか、そういう想定のもとにいろんな作業をさせられるわけよ。そんなことを何遍もやっていたんです。

奥野 やってみるたびに、厳しい数字が出る。

正木 たとえば1年半しかもたないとか、そういうのが出てくるわけだ。要するにストックと、入ってくる重要

資材がどれくらいだ。そして消耗量もわかるでしょう。
 ですから、そういったことはきちっと出てくるわけだ。
 何遍もそういう試算をやって、開戦直前の御前会議のとき
 なんかには提供していたわけです。もうそのときには、
 ぼくはいなくなっていたけれども。そういった計算を何
 遍も積み重ねてやりました。そして御前会議で開戦の決
 定をやったわけでしょう。最後に、このまま行っただん
 じやどうしようもないというので、一挙に開戦へと飛び越
 えちゃったわけだ。もう少し飛び越えないで、こんな危
 なっかしいならやめておけということにすればよかった
 んだけれども。そういった作業をやっていました。
 三瀧 いま考えると、なかなか現実的なおもしろい作業
 だったでしょう。

奥野 そうすると、開戦の直前に、企画院はさっきの事
 件のためにおやめになったんでしょう。

正木 16年1月で、開戦のほぼ1年前にやめました。

三瀧 それから後、日本曹達にいらっしゃるまでの3年
 間は浪人……。

正木 田舎に3年間いたからね。

奥野 田舎って、どこですか。

正木 いや、巣鴨の牢にいたわけだよ。

三瀧 先生、ずいぶん長かったですね。

正木 あそこで3遍お正月が来たわけだよ。3遍やって
 やつと5月に出してもらって、1年半ほど裁判中で（戦
 争が）終わったわけですよ。だから、最終的に判決をも
 らったのは、終戦の年の9月ですよ。それが、もといた
 巣鴨の拘留所の中に法廷が開かれていますんだな。裁判所
 が焼けちゃって壊れたでしょう。どこで開くのかといっ

たら、巣鴨の中だった。それであの事件は無罪になったんだ。

三猪 そのときに、治安維持法が-----。

正木 まだ生きていた。たしか10月にあれが廃止されたから、ぎりぎりなんですよ。

国民経済研究協会をつくる

三猪 そのときは、先生は日本曹達-----。

正木 そのときは籍だけね。ぶらぶらしていろとか、こう悪いでしょう。仕事も退屈だし、ちょっと籍を置いていたんです。

戦争が済んだら急に忙しくなると、財閥解体だとか、占領軍や政府からいろんな調査依頼が来るんで、ぼくはその窓口になった。日本曹達の統計課長みたいなことをしていたんですよ。そのまますぐとすれば、日本曹達の重役くらいになったかもしれないんだな。(笑)

そのうちに、12月に、稲葉君なんかからお呼びが来て、国民経済研究協会をつくらうじゃないかということになったんです。それは、こういういきさつなんです。稲葉君と岡崎文勲（岡崎文規さんの弟。海軍の大佐で、最後は物動計画の総括主任官だった）が、日本の負け方が余りにも無残であるし、将来まで教訓を残さなきゃいかぬとって、日本の戦時経済の記録をちゃんとつくらうじゃないかということが主たる目的です。それで海軍省が解散するときに、たしか何かしらのカネを岡崎さんにくれたんですよ。われわれはみんなすかんぴんだったわけですが、それがあつたんで、それを中心として国民経済研究協会ができた。

あの当時、政府の方でも幣原内閣だったか、戦争経済の調査会をつくらうというので、それに佐々木義武さんが入った。有沢広巳さんがたしか主査で、戦争調査会をつくる。それで本格的に長期の計画を立ててやることになっていったんだけど、内閣がかわったんで、つぶれちゃったんだよ。

奥野 結局、何にもしなかった。

正木 それで仕方がないから、われわれの方で統計資料だけ整理しようというので、焼け残った物動計画の資料だとか、生産拡充計画やいろんなものの資料を整理しかかったわけです。

そうこうしているうちに、片方で統計の再建の問題が起るし、片方では占領軍がやってきて、戦争中のいろいろな記録を片っ端から各省に要求して、出させたわけでしょう。それが例の戦略爆撃調査団なんだ。

奥野 翻訳なす、たあれですね。

正木 GHQが物すごい勢いで各省へやってきて、1週間とか2週間のうちに資料を出せという調子で持っていくでしょう。引き揚げてみると、資料が食い違っていろんなわからないんだね。何遍も照会があったりして、えらい苦勞をしたわけなんです。そのまま、司令部がさっさと向こうへ持っていったわけですね。それで1年ほどたったら、ああいうリッパなレポートになって出てきたんですね。

あれはどっちかという、極東裁判の基礎資料にしようということ、それからアメリカの今後の戦略爆撃の基礎をつくること。どの程度の効力があったかということを決めようというのが目的でしょう。空軍と海陸軍のど

っちを主にするかといった戦略的な目的で、ドイツにおける場合と日本における場合とで具体的に調べたわけだ。

それがノット、その間の軍事指導者のいろんな状況をヒアリングしたのは、極東裁判の戦犯の証言を得るためだった。だから、あのレポートの中の相当膨大な部分は、軍の司令官や何かの証言をみんな集めていました。むしろ、太平洋戦史であった。写真だとか社会状態、いろんなものを調べていますから。

それをたまたま私が商工省にいた時分に、その報告書が国会図書館に積んであったので、これはおもしろいし、かねがねお目にかかりたいと思っていたものにぶつかったので、夢中になって読したんです。何かそういったご縁があったんですね。

奥野 そうすると、国民経済研究協会におられたころは、まさに司令部が資料を各省からどんどん引き揚げている最中ですか。

正木 最中ですね。

奥野 国民経済研究協会の名目的な親玉はどなたですか。稲葉さんですか。

正木 最初は岡崎文勲さんかな。一番初めはちょっと記憶していませんが、和田さんが経済安定本部長官をやめた後。たしか和田さんですね。

奥野 それはすいぶん後ですよ。だって、国民経済研究協会ができたのは、20年の暮ですもの。

正木 それは初めはだれが頭だったか……。

三渚 実質的には……。

正木 稲葉君と、岡崎さんと、私、3人くらいでしょう。

三渚 先生は、21年に経済安定本部に移られますでしょ

う。

奥野 この間のことが大事なんですけど……。

三瀬 国民経済をやめられてですね。もちろん民間と役所だから、兼務はできないでしょう。

経済安定本部に移る

正木 その時分の安定本部というのは、非常に広範囲に囑託制度みたいなものをしていて、民間の部長でいて安定本部の部員になったのは幾らもいたわけです。ぼくも、たしか国民経済の肩書きを持っていた。ただ、実務は、やっぱり向こうの方が主ですから、あっちへ行ってやりました。

三瀬 国民経済をやめられて安本に行かれたのではないんですね。

正木 ある時期までは、肩書きを持ったまま入っていた。

奥野 そうすると、山中四郎さんが、戦争調査会に属していたけれども、原爆の治療でウンウンうなっていたころが、まさにこの年の暮ぐらいですね。山中さんは、平が明けてから戦争調査会の方へ出てきたというけれども、その辺ぐらいから、統計再建の動きが始まるわけですね。

正木 そうそう。1月か2月ごろかな。

奥野 次田書記官長が有沢広巳さんに会ったりするのが21年の初めぐらいですね。その辺のところのいきさつを……。

正木 それはなぜかというと、司令部のボンベングサーベイが片っ端から要求するんだけど、こんがらかった、矛盾した資料ばかり来るんで、日本の統計組織は悪いと

いうのでかんかんに怒って、内閣に、至急日本の統計制度を改善せにゃいかぬという課題を出したんです。ノッパは、たしかそれがきっかけでしょう。

日本の方も、大内さんを中心として、余りにみじめな負け方をしたし、今後、統計制度を確立しようというのとたまたま一緒になって、その話は大内さんのところに来たんだったか、高野さんのところへ来たんだったか……。三瀬 吉田茂から高野岩三郎さんへというのは、よく聞く話ですね。

正木 吉田さんが、大内さんのところへ何遍か見えて、大蔵大臣か、日銀総裁だったかをやれという。

奥野 そうすると、あの当時、山中四郎さんが審議室へ移って仕事をしていた、その親玉が橋井真さんですね。一緒にコンビでやり始めたんですね。

正木 それで橋井君とぼくとは一高時代同級生で、向こうも非常に頼みやすかったから、ぼくも頼まれて統計を助けてくれというので参加した。

奥野 一高で一緒ですか。

正木 四中から一緒だったかな。そんな関係がありました……。

だから、安定本部プロパーの仕事よりも、そういう形で統計の方と一緒にやってくれといわれて参加したわけです。

三瀬 ずいぶん早いね。

奥野 それで一番初めの統計懇談会と称する、改善委員会ができる前の統計懇談会、あの時代から先生は首を突っ込んでおられますね。所属は国民経済研究協会ということで、先生の名前が入っていますね。

正木 たしか駿河台の明治大学の近くの建物の中でやっていたんだもの。

奥野 大蔵省文庫のビルでした。

三浦 お茶の水の駅から行って、右側の角でしょう。

正木 あそこに国民経済研究協会もいたし、たしか統計研究所もあったし。

奥野 ぼく、大蔵省文庫へアルバイトに行きましたよ。資料を一生懸命写していました。

正木 そこでやったわけですよ、みんなそうそうたる連中が集まってきたので。そうだ、巖ちゃん（末弘巖大郎）もいたよ。末弘先生の日本政治研究所とかいう研究会もあったでしょう。あそこにああいったものは結構くらいあったですよ。

奥野 大蔵省の文庫の資料室もあったんです、上の方に。このビルは、いま明治大学の所属ですね。

正木 もとに戻ったんだ。

三浦 統計懇談会のころから、あるいはもっとその前から、国民経済研究協会から、すでに統計に大いにかかわりを持っておられたわけですね。

正木 そういった関係では、やっぱり一番気になったのは、戦時中の戦時経済に関する統計資料をどう整理するか、今後どういうふうにして日本の再建のための資料を提供するかというようなことが、みんなの頭にあったでしょう。だから、この問題をいつも持ってくるわけですよ。

それで、国民経済研究協会で作った仕事で、戦後の日本の生産がいまどれくらいの状態になっているかということで、国民経済研究協会の生産指数というものをつく

たんだ。それが戦後の新しい経済統計の始まりですよ。

三渚 それは何に……。

正木 国民経済研究協会の雑誌に発表したり、新聞に発表したりした。ともかく戦前基準にして十何%だとか、だんだん上がって行って、しまいには30%になりますけれども。

三渚 鉱工業の生産指数、9年-11年ベース。

正木 たしか9年-11年ベースかな、5-10年だったか。それをやっていこううちに、司令部の調査統計セクションで日本の経済統計（月刊英文）を出すようになり、その手伝いをやりました。

国民経済生産指数は、商工省のその時分の生産統計をできるだけ集めてもらって、それを指数化して行ってやっていた。そんな関係で、商工省統計とは縁が切れなかったわけだ。商工省の統計局長にやがてつながって行くわけです。

奥野 21年の5月ごろに、統計懇談会というのが、山中、橋井両氏首謀のもとに開かれまして、正木先生も入っているんですが、そのときに正木試案というものをしゃべっておられますね。そのメモ、残っているんですよ。「経済安定対策関係統計資料要目」という。何か考えておられたらしいですね。

その次に、1月ほどたってからの懇談会では、統計局長の川島さんがそのちょっと前に、人口が減るという爆弾発表をやっちゃって、その糾弾会が……。

正木 大問題になって、それで首になっちゃったんだよ。

奥野 それに関して正木先生が、第2回懇談会でもうちょっとはっきり……。

正木 つまり、資料になる統計の関係で、出生率が落ちたんだよ。それで統計局長の見解とかいうので、人口が減るということをいっちゃったんだ。あれは統計のちょっとしたあやで、またもとに戻った。戦後のベビーブームにつながる直前だから、読み違いだったわけですよ。

奥野 あれ、橋井さんも大変怒ったらしいですね。この大事なときに、そんなデータを発表するとは何事だと、だいぶもめたらしいですね。

その後、統計制度改善委員会ができますね。そのときに、正木先生は委員になっておられるけれども、例の小委員会には入っていないんですね。小委員会というのは実際に作業をした。

正木 たしか入ってないですね。

奥野 ですから、初めの総会と、最後の答申が出るときに顔を出しておられるけれども、中間の作業はやっておられませんね。

正木 統計委員会ができたときに臨時委員になったんだな。

奥野 その後ですね。

正木 あれは審議には入っていたけれども、国民経済研究協会を代表して参加した程度の形だったんじゃないか。主にあれは高橋正雄さんとか大内先生とか、学者グループでやっていたから。

三浦 内閣審議室に21年ごろできた統計研究会には、先生は関係ないの？

奥野 勤労生計分科会か何かに入っておられたんじゃないですか、中山伊知郎主査の。

正木 内閣総理大臣官邸か何かで何遍かあって、ぼくは

経済関係の指数の何かをやっていたかもしれないな。うろ覚えだけれども、近藤康男さんと、戦後の指数をどうつくるかというベースの問題とか、構造が変わっているでしょう。戦後の構造がどうなるかわからないし、戦前基準ではまずいし、指数が非常にむずかしいという話をした覚えがあるよ。そういつたときは、連鎖的なやり方があるでしょう。そんな総合化の方法がいいんじゃないかという話をしたことがあったね。ベースを毎度変えていって、連鎖指数みたいな方法でやるよりしようがないんじゃないかとか……。

三渚 構造がどんどん変わるから。

正木 固定的なウエイトではフィッシャー式をやってもむずかしい。戦後の型と戦前の型と決まっていればいいけれども、戦後がまだちょっと動いているから、連鎖的なやつでやるしかないじゃないか。そんな議論をしたことがあるね。

奥野 そうというのが終わって、21年の暮、12月28日に統計委員会ができますね。そのときに、事前のリストを見ますと、正木先生は委員名簿に載っかっているんですよ。ところが、実際にスタートしたときには委員ではなくて、履歴書を拝見すると、年が明けて臨時委員ですね。

三渚 準備会には正木先生のお名前があって……。

奥野 12月20日にやっているんですよ。

正木 だって、こっちよりも統計委員会委員の方が格が上でしょう。こっちは、この時分の課長クラスでしょう。

三渚 だけど、こっちは大内、近藤、野田、川島というのは、後に統計委員会の正式委員になる。

正木 あと友安亮一、山中四郎、大沢融は各省代表。そ

うか、まだあれは烏になっていないからね。

奥野 山中さんの古い資料をぼくは持っていますんですけども、それを見ていますと、山中さんは毛筆の字が大変うまくて達筆なんですけれども、その達筆で書いた委員候補者名簿があるんですよ。「統計委員会委員名簿」かな。正木先生の名前はそれに入っているんですよ。ところが、実際ふたをあけてみると、正木先生は入っていないんです。どうしてかなを思っているんですけども。

そして、別に臨時委員というような制度がありますから……。

正木 数の枠があっただけじゃないですか。

三浦 それで正木先生と、日銀の篠原周一氏と、人口研の岡崎文規さんが臨時委員に入られた。

正木 それは、直接の各省の統計部局の代表じゃなくて、日銀はまた各省とはちょっと違っていたから、日銀の統計局長と、人口問題研究所とか、ぼくは安定本部という意味で入っていたんだと思うんですよ。

三浦 したがって、第1回の統計委員会からは出席していらっしやうわけですね。

正木 しています。12月に官邸で発足して、雪かなんか降っていたね。

奥野 あれ、12月27日なんですよ。御用納めの前の日でしょう。

正木 雪が降った。そんな記憶があるね。

奥野 いまや歴史ですけども、歴史的には12月28日、御用納めの日に開いたことになっていっています。実際は、その1日前に開いているんです。

正木 御用納めの日にやっただけじゃおかしいじゃない。

奥野 それは、事実と歴史がちょっと違うんですよ。

正木 先生の場合は、われわれにとって後になられる統計委員会の常任委員の方が印象が強いんですが、臨時委員というのは何をやられたんですか。

正木 経済安定本部との連絡みたいな、安本代表みたいなものじゃないんですか。強いていえば、そのときの私の母体、活動分野は、総理府統計局に行くまではまだ安本にいたわけでしょう。統計局に行ってから、すっと臨時委員でしょう、森田さんが委員だからね。

奥野 しかし、統計局におられたのは半年足らずですね。その間は、森田さんが局長になっていたんですか。

統計局次長となる

三渚 1カ月おくれぐらいで、先生が統計局次長になられたんですね。

正木 森田さんが、局長になるのをなかなかウンといわなかったんだよ。「私は学者で、経験がないから……」と。

三渚 川島さんに遠慮してということもありますか。

正木 そうじゃなくて、「だれか行政の方をやる人をつけてくれなきゃ、私はいやだ」といったんだよ。それで、ぼくが行くことになったんだ。しばらくお手伝いしようというわけで。何も半年でやめるつもりはなかったんですよ。もう少しいるつもりでいたわけですよ。

けれども、その6カ月間というのは、ぼくにしてみればわりと統計局のいろんな仕事をしていた。1つは、庁舎の再建の問題。

奥野 有栖川公園のそばの庁舎で、焼けたんでしょう。

正木 いまの河田町の陸軍砲工学校の跡をくれたわけで

すよ。けれども、馬房というて、馬小屋みたいなのがわずかに残っていただけだったんだよ。たちまち庁舎をつくらにゃいかぬ。その時分、資材がないでしょう。まず資材をどこかで得てこなきゃならない。輸入はもちろんできやしない。ある物を持ってきたしなきゃいかぬ。

それで考えたのは、結局その時分に、軍の兵舎だとか格納庫だとか、いろいろなものが神奈川県とか千葉県にたくさんあったわけです。それがみんな空っぽになっていす。それをくれるというわけだよ。予算をもらって、資材を探しに行ったわけだ。統計局の立花君といったか、庶務課長を連れて千葉県をぐるっと回りまして、「これがいい」とさっぐらい指定して、それを集めて建てたんですよ。

三渚 結局、古材で。

奥野 しかし、そのわりにかっこうついていたね。

美濃部氏を引き出す

奥野 美濃部亮吉氏を引き出した話を、ちょっと思い出してください。毎日新聞の同業のよしみですか。

正木 彼は論説委員をやっていたんだ。その美濃部君を呼ぼうということは、おそらく大内先生のお考えなんだな。自分が頭になってやってもいいけれども、事務をやってくれる人がなきゃいかぬ。美濃部はどうだろうかという話があって、「美濃部さんが来てくれるかどうか、おまえ行ってこい」というので、ぼくが使いになって行っただけです。毎日新聞の編集部に行って、「こういう話があるんだけど、どうですか」といった。

三渚 そのとき、初対面ですか。

正木 名前は知っていたけど、おそらく初対面に近かったろうね。ぼくは余り美濃部さんにつき合いがないし、本は読んでいなくても、知らないから。それはただ大内先生の使いとして行ったわけですよ。

「何か条件がありますか」といったら、「自動車をつけてくれ」という……。

奥野 やっぱりそこで出たんですか。

正木 条件はそれだけなんだ。

奥野 それはご本人もいっているもの。

正木 それを確保するのに、後になって苦勞し、法制局に行って、統計委員会事務局長の待遇の問題について談判した。「1等級で自動車をつけるぐらいの待遇でなきゃ、各省の動きを調整することはできません」といって、山中さんと私とが行って大いに粘り、結局粘り勝ちをした。その時分の法制局の参事官、何といったかな、後では世話してくれましたが、初めは「そんなもの要らぬ、要らぬ」と、大きな手でテーブルの上をなでるんだ。何遍行っても「ダメだ」というんだ。やっそこそれを確保したときには、山中君と大いに喜んだことがありましたね。

三渚 それも、ある座談会で美濃部さんがいっておられます。「自動車もつけてやるという甘い言葉に乗せられてやったのが、そもそもの間違いでした」と。

正木 本人も覚えていられるわけだ。(笑)

奥野 あの車、いい車だったんですよ。初め小型の車で、ルノーとかオースチンを使った。

正木 統計委員会の委員長にはついていなくて、車かちやんとついていたのは事務局長だけだった。あとは雇い上げで、それを大内先生と私が借りたりして、送り迎え

した。先生はノ週間に3週ぐらいしか来なかったから、送り迎えして、一緒に車で帰ったりした。専属のは美濃部君だけがくっついていうわけだ。(笑)

奥野 ご本人は、「エコノミスト」をやったかったんだといっていますよ。

正木 そうでしょうね。その方が性に合っていたかもしれないね。

統計局次長時代(続)

三瀬 先生のさっきの話の続きは、統計局の庁舎を、古材を集めて……。

正木 その時分、予算では、庁舎を建てるのは公共事業費という費目にあるんですよ。公共事業費は、安本本部が具体的に配分を決めるんです。それには、枠だけは何億と持っていて、具体的に何につけるかということは、資材の手当のついたところにくれるというのが、
「おまえ、取ってこい」というわけだよ。予算の方は簡単にくれた。どうせ余っているんだから。

じゃ、探してこようというので、2日間か3日間、千葉をぐるっと回って、ともかく格納庫ノつと、やや大きな兵舎をえつくらい約束してきて、解体してこっちに持ってきて建てた。半分くらいその資材で建ったんじゃないですか。

それから、22年の10月に臨時国勢調査があつたでしょう。あれも司令部から「やれ」という命令があつて、予算はすぐつくんだけれども、一番大事なことは結局資材なんだ。何千連という印刷紙が要るわけでしょう。そこで、予算を取るとすぐに安本で用紙の割当枠をもらい、

また、企画庁時代の関係があったから、王子製紙にかけ合ってすぐ用紙を確保してしまった。

三階 それは森田先生ではできないですね。(笑)

正木 ちょっとできないですね。それはぼくのコネだね。実際の統計そのものは森田さんがやられたけれども、ぼくはもっぱら裏方をやっていたわけです。

三階 それから商工省の局長にいらっしゃるまでの間、つまり次長の間は半年ぐらいでしょう。

正木 その時分は、世の中が非常に動いていたからね。

あのときに、例の人口動態の移管問題が起こって、最終的に決まったのは、ぼくが商工省へ行ってからかもしれないけれども、あの間、やっさもっさやっていたよ。その前かな、人口動態統計表の改善や死因分類の改正について司令部と会議を続けていた。そのうちに、急に変わったんだよ。

三階 それは全く司令部の意向？

正木 司令部の一方的な意向だね。だから、統計局としてはずいぶん抵抗したわけでしょう。人口の静態と動態の二大統計を分離するんだから。それは、ぼくは余りタッチしていません。

そのうち、商工省の岩武照彦君が使いになって、「商工省に来てくれ」といつてきた。岩武さんとは、企画院のとき一緒になったんですよ。商工省から来た調査官で、一緒にやっていたし、前の統計委員会をつくる時分にも顔を合わせているでしょう。商工省に統計局をつくるときに、なぜぼくのところに局長を持ってきたのか、ほかになかったのか、どうもよくわかりません。

商工省調査統計局長となる

三階 岩武さんは、後に中小企業庁長官なんかもなす。たんでしょう。

正木 この点は岩武さんに聞いた方がいいかもしれないですね。

三階 ついでですけれども、武内信男さんと岩武さんの上下関係は、岩武さんの方が先輩？

正木 武内君は、どちらかというとたたき上げの感じでしょう。岩武君の方は、キャリアの正統派の……。官房の統計課長というのは偉いんだから、大体みんな次官くらいにまで行くようなコースなんだよ。それを岩武君はやってきたわけでしょう。

三階 岩武さんが先生を引っ張り込んだわけですね。

正木 そう。だから、その前のいきさつは知りません。ただ、当時、例の経済民主化の指令が出て、戦時中のいろんな統制会だとか民間の統制機関を全部即時解散しろというわけで、解散しなきゃならない。片一方では、経済統計を全部至急に整備しなきゃならないという、両方の矛盾した指令が出た。それで、今度は役所でそれを全部引き受けなきゃならないことになりまして、ぼくが商工省へ行って、生産動態を中心に4つの課をつくらした。センサスの方は、武内君がやっていて……。

三階 それは工業統計とか、かねてあるわけですね。

正木 センサスの方は、彼が実績もあるし、組織もある。だが、生産動態統計をどうしてつくるかとか、どうするかということについては、政府側に準備が全然なかった。だから、当時解散命令の出た民間の統計機関を吸収しましてつくれたわけですね。ですから、最初のその方面の課

長さんは、民間団体の調査機関のスタッフの人でした。
三猪 生産動態のようなのは、大体民間の税制団体でやっていたのですか。

正木 戦争中、実際にやっていたんです。

三猪 それを先生が、いい意味のコネでということもありましようね。先生、そっちの方に造詣が……。

正木 どういう関係か知らないけどね。

三猪 ある座談会にもありましたが、4課ふやして、基本統計調査、繊維統計、機械統計、化学統計、鉱業統計、生活物資統計の6課の編成にした。

正木 あとのやつはみんな生産動態です。それが大体マンスリーの統計と、旬報と、週報でしょう、あの時分やかましくて。石炭なんて、たしか日報かな。

奥野 石炭は傾斜生産方式で、情報をつかむことが優先だったのでは？

正木 週報でも、旬報でも、初めてです。そうした統計は、官庁ではいままでとったことがないでしょう、民間ではとったかもしれないけれども。それを一々とってくるのに、運ぶ輸送組織を考えなきゃならないわけでしょう。汽車が込んでいいるから、汽車を優先的に確保するというので、鉄道と交渉して、統計の輸送係の特別の乗車切符を出させたり、輸送の箱をつくらせて、その中に統計票を詰めて持ってくるようにした。

三猪 本当の運び屋ですね。

正木 そのシステムをつくらせて、やっと旬報や何かができた。

三猪 すると、先生が商工省の統計局長になられて、一番最初にエネルギーを貰ったのは、生産動態関係の

整備-----。

正木 生産動態をいかにしてちゃんと集まるようにできるかということ、それだけに人手を必要としますから、建物、入れ場所もないでしょう。まず人を千何百人集めたんだけれども、まだ庁舎が決まらないんで、新しい庁舎探しを岩武さんと二人でやった。あっちこっち探しているうちに、出物があって、牛込河田町で女子医大（当時女子医専）が寄宿舍を売ってもいいというので見に行つて、これをもらおうということになったんです。

三瀧 行く先々で、庁舎でご苦労されたわけですね。（笑）

正木 すいぶん恨まれたわけですよ。女子医専としちゃ、大事な寄宿舍を泣きの涙で手放さなきゃならない。財政上苦しかったらしいんだ。それを、前の校長の吉岡彌生さんと談判して、とにかくもらい受けて、そこにやーと入れたわけですよ。

それまでは、職員は集めたんだけど、さしあたりいる場所がないから、日比谷公園のどこかを借りて、出席だけとって職員を帰すんだ。

奥野 どこで仕事をさせるんですか。

正木 仕事は、その間しなかった。（笑）

三瀧 当時の集計は、どういうふうにやっていたんですか。

正木 手集計です。基本統計のところは、たしかRR、レミントンのタビュレーターが三台ぐらいあって、壊れかかっていた。

三瀧 先生は、鉱工業生産動態の生みの親だな。

正木 至急に整備しろという使命を帯びてきて、その整備が大体終わった段階で首になったようなものだ。

三渚 先生は商工省統計局長にまるまる2年いらっしゃいますね。

正木 その間に、昭和25年（1950年）のセンサスがあった。

三渚 そのころ、並行して、近藤先生が農林省の局長にもなられたり、森田先生が例の統計局長とか、とにかくそうそうたる局長が並んで……。

正木 統計局のような技術の要るところは、局長はやらせろということに統計委員会決めていたのです。

三渚 全くつまらない余談ですけども、商工省が調査統計局で、農林省が統計調査局で、名前がひっくり返っているんですが、余り大した意味はないですか。

正木 それは当時の司令部の月報が「リサーチ・アンド・スタティスティクス」だね。要するに日本経済の調査をするために統計をつくるんだから、統計局みたいに、統計をつくるだけじゃない。むしろ分析することが主眼点だというので、調査統計局になったんでしょう。

三渚 1950年の世界センサスの直前、昭和24年の5月まで、商工省の統計局長なんですね。そこで、50年センサスの準備は、いろいろかかわっておられたと思いますけれども、基礎統計の方の工業統計で、50年センサス絡みでは何かお話しになることございますか。

正木 その時分に、工業統計を毎年やっているでしょう。ところが、集計がたまっちゃって、3年も4年もおくれているんですよ。その上に、大きな統計を新しくやまわけになかなかいかないような状況で、極力、いままでのおくれているものを取り戻しながら、新しいものをつくっていく。

そのときに、毎年やるか、それとも隔年にやるかという選択の問題と、もう一つ、商工省だから、商業統計をどうしてもやりたい。これは5年に1通でなく、2年に1通でも、ぜひともやりたい、どれか犠牲にしてもいいという考えだった。当時、会社統計というのがあったでしょう。いまでいえば、事業所統計みたいなものなんだ。利用度も非常に少ない。ただ、商工省が会社関係の統計をやることになっていたので、事務的統計なんです。だから、これは譲ってもいいということもかなり強引に決めた。ちょうど大蔵省がその時分に、自分のところに1つも指定統計がないわけだ。これを企業統計的なものにして、ちょうど証券局ができて、大蔵省が証券行政をやる。それまでは商工省がやっていた。昔は、株式取引所の監督なんか商工省がやっていた。それが戦後大蔵省に移った。そういった意味で、大蔵省が会社の実態を調べる必要があるので、ぜひ会社統計を譲ってほしい。会社統計というのは、商工省がずっとやってきたんだ。それをやるかやらないか、どうするかで、だいぶ問題があったわけです。

現実には、商工省行政にそんなに大して役に立っていないし、いまのままじゃとてもダメだし、商工省としては将来、商業統計をやりたいということがあったんで、ぼくとしては手を振きたかったんだ。それで武内君なんかは、役所のやっをよその省にやることはない、大反対したよ。けしからぬと、だいぶいわれたけど……。

三階 既得権を失う。

正木 それを私は押し切って、大蔵省に引き渡した。これは珍しい例だと思います。

三階 人口動態と違うのは、みずから進んで……。

正木 あれは取られたんだけど、役所間の話し合いで、指定統計として渡した。

三階 それがやかつて法人企業統計に行くんでしょね。

正木 商工省に置くよりも大蔵省に行った方がリッパなものになるし、かわいかってくれるから、やろうというんで、移管したんです。

三階 いま先生がちょっとおっしゃった、工業統計を毎年やらないでもいいじゃないかというのは、ようやくいまごろ行政管理庁（統計）でおわかりになって、というのは、いんなセンサスが重なってしようがないというので、あれは明治42年以来と、いまだに通産省かいうんだけど、あんなセンサスを毎年やっている国は世界じゅうにないじゃないかと。いまごろそれが具体化しているようですよ、まだですけれども。すでに先生のときからそういう話はあったんですか。

正木 現実に3年も4年もたまって、集計できていなかった。

三階 このごろこそ、コンピュータで早くなったけど、あれだって遅いんですよ。

正木 せいぜい30~40人で集計していたんだから。

三階 50年センサス絡みで、産業分類の改定に、先生がソッギー博士なんかとのやりとりで、統計委員会の委員として1つの責任を持たれたのか。

正木 センサス計画の中に、国際的に共通的なプリンシプルにのっとった分類をつくる、日本に適用できるような産業分類をつくるということになった。ぼくと、森数樹さんと……。

三渚 ぼくは、そのころ／＼年だけ統計委員会事務局にいて、先生にくっついて行ったことを覚えているんですよ。相手はソッギー。

正木 太った方で、ずいぶん熱心な人だったね。

三渚 結局、50年センサスの前の年の1949年に、日本標準産業分類ができた。先生はそれをつくられたところで、50年センサスの前に商工省の統計局長はおやめになった。

正木 たしか機構改革があったのは5月か7月でしょう。

三渚 商工省時代に、上杉正一郎さん（現在は東京経済大）なんかと、そのとき初めてお見知りになったわけですか。

正木 商工省で何人かスタッフを呼んできた、その中に上杉君も——あれは満鉄かな。外地から帰ってきた。

三渚 満州におられましたね。やっぱり一高なんですよ、もちろん後輩ですが。

正木 ぼくは知らなかったよ。あそこへ来てから、だれが紹介したのか、はっきり記憶にありませんが……。

三渚 商工省の局長時代に、職員組合というか、労働組合は当然あったと思うんですが、局長とのやりとりというか、あるいは労働組合運動とのかかわり合いは？

正木 いろいろあったね。

三渚 それで例のレッドパージみたいなのもあったわけですが、その苦労話みたいなことはありますか。

正木 一番苦労したのは、たしか昭和23年でしたか、役所の年末のボーナスが閣議でやっとならなただけで、12月28日か29日で、年末までにカネにならないわけでしょう。職員組合がカネもよこせ、局長、借りに行つてこいというわけだ。ぼくはやむを得ず個人で借金したんで

す。銀行では、役所の名前で借られない。しょうがないから、ぼくは国民経済研究協会に行って、稲葉秀三君に頼んで、国民経済のカネを借りたんだ。十何万円か、とにかく借金して、年内にボーナスを払いました。それは1月に返しましたけれども、あのときは各首でずいぶん苦労したんですよ。役所としてはもうお手上げなんで、各局ごとに才覚しろというわけだ。役所に対して銀行は貸さないんだよ。とにかく個人借金。

ずいぶん激しい職員組合で、つまり苦しい経済状態ですから、月給もらったって、半月もつかもたないかでしょう。だから、食糧買い出し休暇をよこせとか、内職休暇をよこせとか、いま考えれば奇抜な要求がいとiro出てくるんだよ。1週間に1遍買い出し休暇よこせとか、内職するから、使用した調査票を無料でよこせとか。使った後の調査票で紙袋をつかったことがあるんだ。個人の秘密に触れるから、これはちょっと危ない。だいが問題はあったけれども、やむを得ぬというわけで、それを出して紙袋をつかった。それを、たとえばりんごの袋かけの袋にするとか。袋が売れたわけだよ。そういう内職を、ミシンを持ってきて役所でやった。そんな苦労がありました。

そのかわり、みんな上下とも非常に仲よくしていらして、集計が忙しいんで、夜勤、夜勤でしょう。ずいぶん一緒に苦労して、メーデーの前夜祭なんかは、職員組合と一緒に盛大にやったです。メーデーのときは芝居なんか一緒にやって、岩武君だっで役者になって、みんなやったよ。

奥野 まさかデモは行かれなかったでしょうね。

正木 デモは行かなかったかもしれない。

そのあげくの果てが、上杉君たちのハンストになったわけだ。ちょうど行政整理の実施時期と、レッドパージのぎりぎりのときと一緒になった。だから、私は役所にいられないということがわかって、同時にレッドパージで、だれがねらわれているのかわかっていたから、上杉君に、一緒に新しいところへ行こうじゃないか、ここにいたら、おまえさんは首になるのは決まっているんだから連れていく。彼はどうしてもウンといわないんだ。ここまできたら、がんばらねばいかぬという。それで、彼と生田君、もうノ人何とかいう3人が、ついにムシロを敷いてハンストになったわけだ。

だから、ぼくがやめた後、残った人は非常に苦勞したわけですよ。豊島隆君が統計部長になったわけですよ。

三渚 先生の後任者は豊島さん。

正木 ぼくは統計委員会へ行くことになったんだな。それで上杉君を統計委員会へ連れていこうと思って、そういう話をしたんです。

三渚 上杉さんは、それをウンといわなかった。

正木 ここまできたら、同志を見捨てて行くわけにいかぬといってたんか切って、もうしようがないというわけだ。徹底抗戦したんだ。あれが長く続いて、とにかくずつとピケを敷いてやっているから、後任の部長なんか気の毒でなかなか入れないわけだよ。だから、最後は蜷川虎三さんに頼んで、あれだけやったら、もういいんだから、皆さん心配しているから、この辺でひとつ帰れよといって、説得してもらった。それまでお母さんや何かに頼んだんだけど、お母さんが行くと、逆にお母さんを説得し

ちゃうわけだ。(笑) 大義名分が立つようにしなければいかぬとかいって。お母さんもむしろ強硬派なんだな。

三瀬 やっぱり蛭川先生に説得を依頼したわけですか。

正木 しょうがないから蛭川さんのところに頼みに行って、蛭川さんが何とか……。

三瀬 正木先生が頼みに……。先生は、その前に蛭川さんはご存じ？

正木 知っていたよ。だって、商工省で一緒なもの。中小企業庁長官でしょう。その前に、労働省に統計局ができてるとき、統計委員会としては、局長に蛭川さんがいいかなと、自羽の矢が立っていたんですが、当時先生は、日本の中小企業問題に没頭しておられ、ウンといわなかった。それで、労働省統計局長はしばらく空席で、課長の金子美雄さんが代理みたいな形で、すぐに局長にならなかった。

奥野 上杉さんを説得した蛭川さんは、まだ中小企業庁の長官でしたか。

正木 中小企業庁の長官は、その年の暮先にもうやめていたと思います。

三瀬 首相の吉田茂とけんかしてね。

先生は、商工省の局長を24年5月にやめられて、すぐ統計委員会の常任委員。それは別にさしたる理由はないわけですか。

統計委員会常任委員となる

正木 ぼくは、そのとき、商工省の統計局を残そうという運動は、GHQのセクションにも働きかけ、みんな一緒になってやったわけですよ。でも、向こうはがんとし

て聞かない。戦前からあった内閣統計局以外、戦後にできた局はともかく格下げするということだから、われわれは出ようということになって辞表を出した。私のほか、農林省の近藤康男局長もやめて大学に戻りました。そのときは、国民経済研究協会にまた入るというようなことを考えていたんじゃないか。そこへ、だれだかから説得されて、こっちへいらっしゃいよということ。内藤勝さんか、紅文吉さんか、何かの関係で、どこかへ一緒に旅行に行、たんだよ。旅先で、統計委員会は常任委員3人と制度が変わるんだから、こっちへ来たらどうですかといわれた。だれの発議でこうなったか知りませんが。もちろんだ内務委員長のお考えがあったでしょう。それで私は2週間ぐらいしか遊んでなくて、すぐ新しい統計委員会に勤めました。

三階 先生の場合、とにかく統計委員会のメンバーはずいぶん長いんですね、本務はいろいろ変わるけれども。

常任委員を27年3月にやめられたのは、機構改革ですか。

奥野 そのちょっと前ですね、統計委員会がなくなるのが、27年の8月ですから。

正木 そのうちに、大内先生が法政大学の総長に引、張られた。それで、法政大学に一緒に来ないかという話だった。講師くらいならいいけれども、本格的な先生になんか自分になる気にならなかったところへ、急に参議院から話があって、そちらの方を進めていったわけです。そのとき、大内先生はみすから参議院に行かれ、予算委員の愛知揆一さんに頼んでくれました。それで、そちらの方が決まった。

三瀬 ちょっと戻りますけれども、統計法ができる昭和22年のころ、先生は委員なんですから、統計法ができることに絡んで、何かお話しになることはありますか。

正木 ぼくがタッチしたのは、統計委員会が発足する前の大内委員会に安定本部代表で出ていたころでしょうね。

そもそも戦後の統計改革の発想の根は二つありました。第一は、戦争で荒廃した日本の官庁統計組織を強力に再建整備すること。その際、中央統計局（内閣統計局）と各省の統計組織との関係、また地方（道府県市町村）の統計部課と中央官庁との関係をどうするか。これは各省の権限に触れますから、激論続発です。川島統計局長から持論のセンサスや人口統計など大規模統計はすべて中央統計局に集中するという川島試案が提出され、これに各省が猛反発した。結局、現実的な妥協案として、内閣に、統計局とは独立した各省庁の統計事業を調整する行政委員会を設ける。地方の統計組織の維持は、この委員会に任せるとに落ちつきました。第二の点は、つくられる統計の質の向上を図るためにどうするか、統計職員の養成、統計所管課の局への格上げと、局長には専門統計家を充てること、各省の統計企画の審査などです。

この二つの視点での合意点を実施するとなると、日本で初めての統計基本法の制定が必要だといわれたんです。この統計法をまとめ上げるには、21年の夏から暮まで、山中事務官が必死の努力をされたわけです。

この構想がまとまっていく過程で、委員会事務局長をだれにするかを大内先生が考えられた末、美濃部君をということとで、私が美濃部君引き出しに当たったわけです。ところで、条件の自動車の件ですが、それは1等級以上

でないと言算上つけられない。そこで、どうしても事務局長はノ等級と主張するわれわれに対し、12課長級でたくさんと主張する法判局との折衝は難航でした。議会に提出する法案審査と定員審査権を持つ内閣法判局は、手ごわい相手でしたね。

この大内委員会で決めた統計機構整備の基本構想が、委員会発足の直後に公表されたG・H・Qのライス使節団報告と大した食い違いがないことを知って、ほっとしました。

参院予算専門員時代

奥野 参議院の予算専門員の時代は、統計とは余り縁がございませんね。

正木 それからは、統計とは直接的に——むしろ予算の研究とか。

三潯 ただ、ぼくが覚えているのは、丸山博さん（当時厚生省）やなにかと、ぼくも、経済統計懇談会というのをつくって、役人も気軽に入れるようにというのが、会場に参議院のどこかをお借りした。

奥野 そうですね。ぼくも顔を出したな。

三潯 それは先生のお顔で、参議院の、いまでいえば議員会館みたいなのも借りた。丸山さんに会った、「統計懇談会、このごろどうした」というから、「いや、サボってやっていない」というと、よく怒られますけれども。

正木 懇談会を始めて、名前は後でつくったんだね。「経済」を入れるか入れないかで、だいが……。

三潯 最初は森田先生も呼んできて、記録によると、国勢調査の話も聞いたりしたんですよ。それから、経済統

計研究会のいわば外郭にした。役人は経経研にはなかなか入りづらいから、気軽に懇談会をつくらう。丸山さんはとても熱心で、法政の田沼肇君なんかも熱心で、先生と語らってやったということがあります。

正木 田沼君は、商工省のハンストの仲間だね。上杉君の下にいたんだ。一緒に首になって、彼は法政で拾われて大成したわけだ。

三渚 先生が参議院に行かれたのは、やっぱりだれかが引っ張ったということですか。

正木 ちょうど和田博雄さんが、参議院の予算委員長をしていた。それで予算審議が終わって、もう仕事が無かったんだけれども。その時分、参議院の専門員というのは3人制だったんだ。いまは1人だけれども、3人で、当時2人いて1人欠員だった。その欠員があるから、おまえ来いというわけで、聞いてみたらなかなかおもしろいところだし、気楽なところだから。

こっちは前から、大内先生は法政に行って、後は美濃部君に任せるといふ方針が大体わかっていたから、ぼくはどこかへ行かなきゃならないでしょう。ちょうどそういうときに、大内先生からの法政行きを断って、参議院に行ったわけだ。

三渚 佐多忠隆さんが金融局長か何か、ちょっと話がありましたね。それは、もっと前のときですか。

正木 それは、和田さんが安本長官のとき。

三渚 参議院の専門員はわりあい長く……。

正木 13年やった。

奥野 長くやられましたね。これ、よかったでしょう、わりにひまがありがたいようにでしたから。

三浦 時間の拘束がそう厳しくなかったでしょう。

正木 とにかく、1年間に30日間働けばいいんだ。予算委員会は30日でしよう。その期間、その前1月ぐらいはかなり圧縮されてありました。予算が審議されているときは、しょっちゅう深夜になりました。

三浦 専門員って、どういう仕事ですか。議員の質問資料づくりではないんですか。

正木 要するに議員の補佐官なんです。なぜ3人も頭がいたかという、与党側の議員を助けたり、野党のを助けたりという意味で、各委員会に2人ずついて、大きな予算委員会は特に3人いたわけ。どこへでも補佐する。

具体的にどうかといえば、たとえばどういうふうにして質問をつくるかとか、資料を要求してほしいとか、そういうことで助けて、最後に予算委員長の報告書を書くわけだ。場合によっては、各党の賛成、反対演説も書いてくれというわけだ。

奥野 両方書くんですか。

正木 ひどいときは、予算委員長の報告、与党議員の賛成演説、社会党が右、左の二つ、公明党、5つぐらいいちどきに書いたことがある。オレが書いたやつをみんな読んでいる。(笑) おかしかったよ。

三浦 そうというのは、まさか普通の大蔵省の役人に書いてもらうわけにはいかないでしょうね、内輪の話だから。

正木 そういうのもあるんです。衆議院あたりは、賛成演説なんか主計局に頼んでいる。そんなふうになっていから、役人に頭が上がりません。こっちは専務でやっているでしょう。だから、衆議院に比べて参議院の調査室は充実していましたよ。ちゃんと調査月報みたいなもの

正木 まだすーと若い時分ね。

三猪 全国統計協会をつくる一番最初の動きは、やっぱり後藤さんが東北ブロックでやったらしいですね。

正木 東北ブロックは、わりあいにとまりがよかった。それから関西かな。

奥野 後藤さんは戦争調査会にいたんですよ。一番若い調査官だったんです。それからすぐ宮城へ引っ張られたんです。

三猪 それは何かお父さんの関係なんだね。果知事へ引っ張られた。

正木 いろんな関係で、もっと早く会うべき人が会わなかったり……。

奥野 お話を伺っていますと、おもしろいですね。

正木 当然会うはずのないようなところで会ったとか、あるんですよ。

三猪 ただ、統計委員会事務局にも、いつとき井上照丸さんとか、内海庫一郎さんとか、おもしろい人がいろいろいましたね。ちょっと後になるけれども、佐倉致君とか。

正木 中原勲平とか。

国学院大学に移る

三猪 参議院を13年間でおやめになって、すぐ続いて国学院大学。あれは木村太郎さんが口説きに来たんですか。木村太郎さんとのつき合いは、国民経済研究協会でしょう。

正木 彼は先に国学院大学に行って、国学院大学に経済学部をつくる主導者になったわけだ。

三瀬 初代学部長。それで、あのころ方々スカウトして
いたんですよ。ぼくもいろいろ相談を……。

正木 それで頼まれて、財政学にだれかいなかという
話で、相談に乗っていううち、とうとうこっちの方に、
来てくれませんかということになっちゃった。私も、参
議院に13年もいれば、そろそろ最後に行き場所を探そう
という気になったんだね。だから、そのつもりで国学院
の教壇に立った。それまで法政大、武蔵大など非常勤講
師では出ていたが、専任の教授は初めてだった。

三瀬 国学院大学には4年半ぐらいいらっしゃいますね。
ずっと財政学をやっていらした。

正木 財政学と統計学でしたか、統計学の講義もした。

三瀬 木村太郎さんは、日本経済論か何かやっていたん
ですか、いまは統計学だけと。

正木 日本経済論もちょっとなやめたことがあるんだ、私
も。3つくらい、やっぱり責任を持たなきゃならない。
統計が2講座。

三瀬 そこでは、統計事業的なことはないですね。

正木 それは、皆さんと一緒にやった経済統計研究会の
中にずっといたということでしょう。

鎌倉市長となる

三瀬 それから今度、鎌倉市長引、張り出しのいきさつ
というのは……。

正木 それは大内先生の口車に乗せられたんで……。(笑)

奥野 口車に乗せられた人が、たくさんいらっしゃるよ
うで……。

三瀬 やっぱ正木先生が鎌倉に在住していらっしゃる

ことも、当然大きな理由でしょう。

正木 ちょうど美濃部君の都知事選目の画策を大内先生が盛んにやっていた、その時分、社会党の形勢が悪くて負け続けて、たしか、やっとう京都の蛭川さんが勝って、どうにか一息ついた。そこで、美濃部の選挙までの間にもう一遍花火を上げにやいかねというわけで、花火材料になったんだよ。

奥野 美濃部さんの選目の1年前ですよ。

正木 大内先生は一生懸命やっていたよ。東京に通っちゃ、大内事務所を開設してやっておられたときだ。

初めは、大内先生に、鎌倉市長選には勝てるかといわれて、とても勝つ見込みはないですよといった。「勝つ見込みがないのに、立つやつがあるか。やめとけ」というんだ。これはしめたと思っていたら、いつの間にか、「君はそのかわり何をするか」というから、「財政学を勉強して、先生のやられた後をやろうと思います」というと、「君は遅いよ。これからあと3年ぐらいやったって、大したものではできっこないんだから、それより市長になったら、何か少しは残るものがあるかもしれないから、こっちの方がいいんじゃないかな」と、急に風向きが変わったんだ。ひどい話で、いつの間にか行け、行けということになっちゃった。

もうぎりぎりになっていましたので、立候補のかれこれ30日前ぐらいに承諾したんです。勝つつもりもなかったけれども。

三瀬 そのころ鎌倉に集まっていた面々というのは、有沢先生とか内藤先生とかいう方々でしょう。

正木 有沢先生は、別にそんなに動いてくださらなかった。

た。内藤先生は、よく一緒になって……。それより、やっぱり一番一生懸命にやってくれたのは、大仏次郎さんとか小牧近江さん、あるいは鎌倉の文化人。大内先生が声をかけて、鎌倉の文化人がみんな立ち上がって、一緒にやってくれたわけです。

三瀬 それはやっぱり正木先生のお父さんの関係がありますでしょう。

正木 それは多少ありますよ。鎌倉彫の関係の工芸家なんかには、美術学校（校長・正木直彦氏）の最後の卒業生がいました……。

三瀬 お父様が美術学校の校長さんをなさったのは、いつごろでしょう。

正木 明治の30年代から昭和10年ぐらいまで、三十何年間やった。最後が美術院長かな。やめたのが昭和8年ぐらいでしたか。明治の33年から35年ぐらいから、ずーと連綿として。

三瀬 初代の校長ですか。

正木 3代目です。初代が岡倉天心。中間に1年ぐらいの人がいまして、うまくいかなかったので、おやじさんが行って騒ぎを鎮圧して……。

三瀬 統計に関係ないですけども、先生のお父さんはどういう経歴、というとおかしいけれども……。

正木 普通の政治家でしょう。文部省の秘書課長か文書課長をしていて、その間に美術教育の調査に欧州に出張なんかしています。美術学校が内紛を起こして、主な先生方がみんな逃げ出しちゃったりして、うまくいかなかったんだ、岡倉さんがやめた後。

三瀬 法学士ですか、東大法学部卒の。

正木 全く美術に関係ないところだったです。

奥野 じゃ、わりに若いうちに行かれたから、ずっと長い間三十何年も……。

正木 まあ、好きだったんでしょうがね。奈良にいた時に、古美術の保存や調査の問題だとか、日本の考古学会をつくった最初のオリジナルメンバーだよ。

三瀬 いままでご存命だったのですか。

正木 昭和15年、教えて79歳。

三瀬 先生は、それに着々近づいていらっしゃる。

正木 もうちょっとだね。(笑)

奥野 鎌倉市長をやっておられて、市政を見る上における統計との関係は……。

三瀬 これは経統研の例会ではちょっとお話し願ったです。書いてもいただいたんです。その後、正木市長去った後、市の統計の資質はどういうふうになっているとごらんになりますか。

一般的な質問ですけれども、自治体の統計というものは、大將がかわると相当変わるものか、それともルールが敷かれたものは、ある意味ではそう変えられないものか。

正木 統計に一生懸命になるときは、基本計画を立てるとか長期計画を立てるときに、資料をつくらなきゃならないでしょう。だから、いろんな総括的な調査もするし、アンケート調査も、サンプル調査もやるし、いろいろな方面で自分もやるし、委託もあって、いろんなことをやりましょう。そういうときは、地方の統計活動はうんと充実しますけれども、そういう仕事が終わっちゃうと、あとは官庁からのお仕着せの仕事しかやらない。

ことに、これぐらいの中規模の、10万、20万以下の都市では、統計でどうするということよりも、大体行政的な報告で知識が足りるわけでしょう。外に対して説得するためには、やっぱり統計資料の形を整える必要があるけれども、行政はある程度報告書の知識で、勘でやれるんだ。最後の基本構想をつくるには、だいぶやりましたし、すいぶんカネも使った。

大内先生、尾崎秀実氏、松川七郎氏

三瀧 話が戻りますけれども、大内先生と正木先生との最初の出会いは、学生時代ですか。先生の学生時代、大内先生は大学にいらっしゃいましたか。

正木 留学から帰ってはいったんだよ。だけど、財政学が土方と交代だった。ぼくの前は大内先生だった。ぼくの次の次が、また大内先生だったね。だから、ぼくは会えなかった。

三瀧 じゃ、学生時代は大内先生との触れ合いはなかった。

正木 むしろ大原社会問題研究所へ通っているときに、大原でお会いしたり、大原の研究会に先生が出てきて講義もされたのを聞いたりした。月例研究会みたいなのが大原にあった……。

三瀧 大原には、先生は別に籍を置かれたことはないんですか。

正木 ないんだけど、いろいろ聞きに行ったりしていた。大阪です。

あそこに細川嘉六さんがいまして、帝国主義論を主にやっていた。ちょうどその時分は、昭和の3年、4年、

中国の国民革命の勢いがずっ と上がってきたときだった。それで細川さんと一緒に、支那革命の研究会を持った。それは私と細川さんと、その時分に「朝日」の支局にいた尾崎（秀実）君なんだよ。その3人でいろんな外電なんかを読み合いながら、中国革命を論じていたよ。そんな関係があって、わりあい頻繁に大原に遊びに行った。三瀬 そのとき、大内先生は浪々の身だったんですか。正木 いや、ぼくが会っていた時分には、先生は東大の——大内先生が浪々の身というのは、つかまっていたからなもの。

三瀬 尾崎秀実ですけれども、ゾルゲ事件については、先生がそういうことで調べられるとか……。

正木 なかった。尾崎事件というものを全然知らなかったんだよ。ぼくは巣鴨へ入ってから、中々る度くらい尾崎氏に会いました。というのは、所内のお風呂へ行くときだとか、床屋に行くと、みんな集まる機会なんですよ。みんな順番を待っている間は、ともかく顔を合わせているから、話はできなくても、あいつも来ているとか……。

どうして尾崎が来ているんだろうと思った。尾崎の後でつかまれば聞かれたかもしれないけれども。ずっ と前にぼくがつかまったから、その関係なんかは聞かれませんけれども。初めに尾崎とのやりとりの手紙なんか持っていたかしたら、えらいことになるんだけれども、ずっ と前ですから。向こう（検察）も全然知らないし。

三瀬 大原の研究会なんかでは何度か会って、それからいまのような研究会を……。

正木 東京でも情報交換なんかやっていた。それから尾崎は大阪から上海へ行ったんです。たまたま東京へ帰っ

てきたというので、その話を聞いたり、そんなことも何遍かしましたよ。

三猪 ぼくら高等学校のときに、尾崎秀実に頼んで講演してもらったことがありますよ。

正木 話はうまいし、はでな人だった。

三猪 ぼくら高校生なんかでも、尾崎秀実という名前は知っていたですね。

正木 むしろ出てから、うちの室内なんか事件を知って、びっくりしたわけだ。

三猪 プライバシーですけれども、先生はいつごろ結婚なさったんですか。

正木 昭和6年か7年か。

三猪 それは先生のお仕事に何か関係ありますか、まさにプライバシーの問題で。

正木 特に関係ありませんな。

三猪 この間、松川七郎さんがごくなられたでしょう。

松川さんとは何か融れ合いがありますか。松川さんはご承知のように「東洋経済」で、お父さんは陸軍大将で、つかまって憲兵隊に送られた話なんか、奥さんにちょっと同ったんですけれども。

正木 松川さんについては、ぼくは「東洋経済」に何人か人をもらいに行ったことがありますよ。

三猪 例の「ハンドブック」をおつくりになったでしょう。

正木 松川君を知ったのは、むしろこういうことじゃないかな。企画庁になるときに、さっさいったようにスタッフをたくさん集めました。「東洋経済」に行って、これはと思う人をえんほど挙げて、本人にも会って、企画庁

へ来いと-----。

三猪 あそこに小熊孝さん-----。

正木 小熊君をもらう。小熊君の話で、松川さんの名前を聞いたのかな。それでええ人来ることになっていた。本人の承諾をとったから、そのとき石橋湛山が社長で、石橋湛山のところへ行って、「国家非常時で人材を要求しているんだ。出してくれ。これとこれと、本人も来てもいいといっているから」といったら、えらく怒られちゃって、泥棒に近いというんだ。人間なんか、5年、10年は会社はまらで損だ、やーとこれから儲かるというときに、何も対価を出さないで財産を盗んでいくようなものだ、えらく怒られちゃった。あんなに怒られたの初めてだった。けんもほろろにやられちゃった。それで、ともかくそれはダメだった。

そんな関係で、あるいは松川さんの方が覚えていたかもしれない。それで統計の仕事をいろいろしたんで、統計のハンドブックをつくる話が出たんじゃないかな。ぼくの方は、それほど積極的に松川さんとは連絡がなかったと思うな。小熊さんとはあったね。あれは商大系統で危なくつかまりそうになったりした。

三猪 松川さんはつかまったんですね。いま話を伺ったら、大橋隆憲さんとか、みんなスネに残つか名誉の勲章が-----。(笑)

正木 危うく助かって。

戦後の統計改革の評価

奥野 締めくくりに、戦後の統計改革、統計再建を、いまにして評価すればどうかということを伺いたいのです。

いろいろな面で評価ができるかといいますけれども、一つは統計のシステムといいますか、体系といいますか、あるいは統計制度、統計そのものにおける面からの評価、もう一つは、地方統計機構を含めまして統計の組織を、いまにして評価すればどうかということなんです。

正木　そういう質問に対しては、戦争直後の状態と、現在みたいは、いろいろな点で充実した時代と違うので、いまの状態から見て、あのときのいろいろな機構整備の問題とか方向とかを論議すると、うっかりすると間違えることがある。

たとえば、センサスの統計機構を集中しなくちゃいかぬとか、場合によっては、機械は統計局に全部集中しようとしたり……。

三瀬　中央統計局構想。

正木　あるいは、それはできなくても、計算センターはあそこに集中しようとか、そういった状況は、当時の状況を考えれば、機械がなかったでしょう。輸入もできない。ぼろぼろの機械をやっと修繕して動かしていた。人手はあるけれども、それを収容する建物がないとか、統計局だって、大ぜいの人間がいちどきに通うと電車があふれちゃって困るとか、いろいろ苦情が出たりするくらいですから、分散しなきゃいかぬ。

要するに、中央に集中することができないんで、地方に計算センターを分散しようとか、地方集計しようという状態は、あの当時だから合理性があるんで、いま考えれば非常に中途半端だし、なぜあんなことを考えたんだらうかというのが出てきますね。そういうことは、やっぱり評価するときに考える必要があると思います。

結局、日本みたいな国だと、中央統計局構想はやっぱり無理だ。各省が、それぞれ必要とする独自の統計機構を使って統計をとるだろう。それをどこかで調整して、連絡、企画をすることは必要であると思うけれども、各省をあんまり抑えても、抑え切れるものじゃない。そのことを、統計局、統計委員会の歴史が証明しているんだと思うのです。理想は確かに1つの方がいい。

ところが、アメリカの中央政府と各省と、組織が違おうでしょう。日本の場合は、1つの国なんだから、各省は統計局に対して、自分の方が下だとは決して思わないから、むしろ内閣の統計局よりもオレの方が上だと思うんですね。

統計局というものが、ああいうように機能がいろいろ分散していったことは、やっぱり必然性だと思いますね。ただ、それはそれぞれの時期、たとえばバイタルスタティスティックスを分離するときの問題だとか、労働統計局ができたときの労働統計を労働省に持っていくとか、ずいぶん無理はしたわけです。あんなのがよく考えて、こっちからの自発的な考え方でなくて、GHQのディレクティブ（指令）でやられたということは、波乱を非常に大きくしたということはありませんね。統計委員会の歴史は、ある意味では悲劇の歴史だね。

三瀬 先生もごらんになって、統計委員会が行政委員会でなくなっちゃって、統計審議会になるでしょう。そうすると、いまおっしゃった、各省が必要な統計を自分のところでつくるというのは、日本としては、その方がまことにふさわしいんだけど、それにしても調整機能が弱過ぎるということはお考えになりますか。あるいは、

それはしようがないんだと。いい悪いじゃなくて……。

正木 たとえば経済統計の資料について、経済企画庁が『経済白書』をつくっているような意味で駆使しているでしょう。ああいう意味で、ユーザーの官庁として、もっと積極的に注文も、こういう統計をつくれとか、こういうふうに集計してくれとか、こういう資料をつくれというようなことをやるべきだと思う。その機能を、各省がばらばらにやっているだけに、ちっとも調整ができない。やっぱりもう一段上の立場で、ユーザーとしての調整的な役所として、企画庁はもう一段上になってもらいたいという感じだな。

三階 そのときに、この間も経統研でちょっと問題になったんですけども、企画庁が統計利用のおそらく最大のユーザーですね。ところが、それがSNA（国民経済計算）を国連の方式でやるわけですよ。いろんな統計も、SNA向けにのみつくるといふ一つの偏向というのがあるんで、ユーザーといっても、企画庁のユーザー・ブラス、われわれも含めた、もっと一般のユーザーがあるわけでしょう。そこに、また非常にむずかしい問題が一つできていると思うんですね。

正木千冬氏 略歴

明治36年12月10日 東京都に生まれ
 大正15年3月 東京帝国大学経済学部卒業
 大正15年4月 大阪毎日新聞社に入社
 昭和10年11月 内閣調査局専門委員
 昭和12年10月 企画院調査官
 昭和19年10月 日本曹達株式会社に入社
 昭和20年12月 財団法人国民経済研究協会常務理事
 昭和21年10月 経済安定本部部員
 昭和22年1月 内閣統計委員会臨時委員
 昭和22年2月 内閣統計局次長
 昭和22年6月 商工省調査統計局長
 昭和24年6月 内閣統計委員会常任委員
 昭和27年4月 参議院予算委員会専門員
 昭和41年4月 国学院大学教授
 昭和45年9月 鎌倉市長に就任
 昭和53年9月 鎌倉市長退任